

関ヶ原合戦絵図と大正天皇

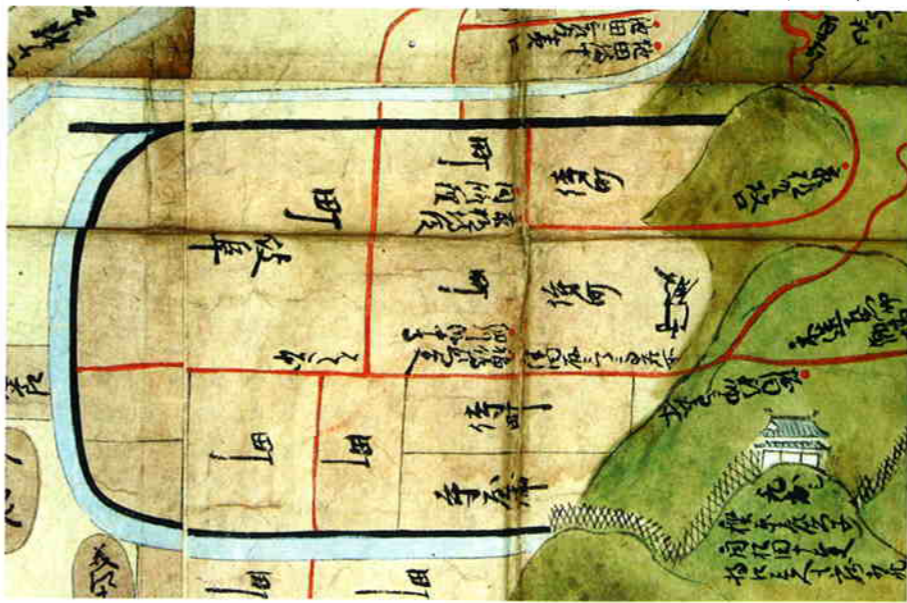
寛 真理子
岐阜市歴史博物館学芸員

岐阜市歴史博物館でお預かりしている社宝の中に、関ヶ原合戦絵図があります。紙袋と木箱に入れて大切に保管されてきた一枚で、明治二〇年（一八八七）四月に豊島徳三郎により寄進されたものです。徳三郎は夏海ともいい、岐阜市中竹屋町に住んでいました。桂園派の歌人で、伊奈波神社神職の塩谷則満らと詠んだ和歌一卷（本誌五号・一号に紹介）も寄進した人物です。

慶長五年（一六〇〇）九月五日の関ヶ原合戦は、徳川家康が天下をにぎる決定的な戦いとしてよく知られています。この本戦に至るまでに、苗木・郡上八幡・竹ヶ鼻・米野・岐阜・杭瀬川など美濃各地で戦闘が行われました。このとき岐阜城主であった織田秀信（信長の嫡孫）は東西両陣営から誘いをうけ、結局西軍に投じます。八月二三

日、福島正則ら東軍との戦いのすえ城は陥落しました。こうした前哨戦を経て東西両軍は関ヶ原に場を移して決戦となります。合戦のようすは「関ヶ原記大全」などの合戦記としてまとめられ、絵巻や屏風に描かれました。戦闘の経過を一枚にまとめた絵図もかなりの数が残されています。いずれも、合戦直後ではなく後世になって作成されたものです。伊奈波神社の絵図もその一つですが、縦（南北）二〇六センチ、横二五二センチ、約三畳という大きさは最大級でしょう。もともとは長方形でしたが、今は一部が失われて凸形をしており、欠失を後に補って書き込んだ部分もあります。東は岐阜、北は白樫（揖斐川町）、南は高須、西は関ヶ原・伊吹山まで、ほぼ美濃の西半分近くにおよぶ地域が描かれており、右上部には空間を大きく歪めて郡

上八幡を入れ、清須・犬山・起（おこし）一宮市）など木曾川対岸の尾張国も一部含まれます。赤坂虚空蔵（明星輪寺）・円興寺と源義朝らの墓・養老の滝・熊坂長範物見の松などの名所も絵画的に描かれ、合戦とは別の楽しみもあります。川や町は模式的ですが、これは他の絵図とも共通する描き方です。参戦した武将の人名には赤丸（東軍）・黒丸（西軍）の印があり、対戦する武将は向かい合って記載されているのが臨場感を生んでいます。並記された日付と時刻を順に追っていくと、美濃各地での戦い、東西両軍の移動、本戦の配陣、島津軍の逃走経路などの戦局が手に



取るようにわかります。ここには細部が読みとれるほどの全体写真は載せられないので、岐阜町周辺部分だけを掲載しました。伊奈波神社は中央下の「寺屋敷」とある付近に当たります。

このとき伊奈波神社は大きな被害を受けませんでした。合戦後の九月二日に軍勢の乱暴などを禁じた徳川家康の禁制が社宝として伝えられています（但し、宛名はありません）。

この絵図には二通の附属文書があります。①一月一〇日付けて専空房（印は「稲河」）から伊奈波神社社務所にあてた絵図の預かり状、②明治三二年（一八九八）一月一日付け、岐阜県知事の安楽兼道から伊奈波神社社司の塩谷幸満あての返却状です。おそらく①は②に先立つもので、②には次のように書かれています。

右
皇太子殿下へ御覧に供し候ところ、御覧済みに付き、御返戻に及び候なり」



絵図に描かれた養老の滝

一九才の皇太子（のちの大正天皇）は明治三年に京都・奈良を訪問し、帰途に岐阜に立ち寄られました。この旅は病気がちであった皇太子の保養のために侍医が進言して計画されたもので、一〇月三日に大磯出発の予定でしたが、発熱のため一〇月一〇日に延期されました。往路に岐阜で鶴飼観覧という予定は取りやめられ、京都・奈良で寺社や陵墓などを訪れたのち、一月九日の岐阜市への訪問となります。新聞には、宿所となる西別院の検分、市民による奉迎準備が五日から着手されたことが報じられています。九日の

別院を出発、九時一五分に岐阜停車場発車。知事・市長・市議会議長らは同乗し、一〇時に名古屋に到着するまでお送りしました。

巨大な絵図を安楽知事がどのように広げて説明したのか、そのようすを想像すると博物館学芸員という立場からは少し心配でもあります。

一時一二分に見送りの花火とともに京都の七条停車場を出た汽車は、三時三七分に岐阜に着きました。安楽知事は途中まで出迎え、同乗して岐阜に戻っています。駅頭にはアーチが建てられ、官吏・市民・学校生徒二万余人が並び、皇太子一行は人力車で西別院へ向かいました。本山の大谷光瑞門跡も西別院に出張して御機嫌伺いをしています。翌日は午前八時四五分に西

さて、この行程のどこで、関ヶ原合戦絵図は一覧に供されたのでしょうか。一〇日に伊奈波神社から貸し出されていますから、宿泊した九日ではありませぬ。おそらく、九日の談話が関ヶ原合戦に及び、翌朝になって急いで伊奈波神社から借り出したのでしょう。①の差し出し人である専空房は、宿所となった西別院の役僧ではないかと思われまます。一〇日の日程では、早朝のあわただしい時間帯とは思えず、西別院出発から乗車までもわずか三〇分ですから、駅舎のどこかで絵図を広げる時間もなさそうです。すると、安楽知事が同乗した車中の可能性が高いのではないのでしょうか。大正天皇の皇太子時代には、「微行」の意味から特別の御召列車ではなく普通列車を使うことが多かったそうです。空間にゆとりがあるとは思えない車室で、この

明治四二年にも、岐阜・北陸への皇太子行啓がありました。九月一五日後五時前に宿所の西別院に到着、美濃紙などが献上され、翌日は県庁・師範学校・物産館などを巡覧。夜は提灯行列があり、鶴飼の鮎が献上されました。翌一七日には大垣に移動し、最後の大垣藩主でこのとき式部長官であった戸田氏共の案内で大垣城天守閣に登りました。そこで「古来戦争の跡に就き彼此御話し申上ぐれば、殿下には非常に御満悦にてシガーの三本も立消ゆる迄降りさせられず、近侍の者が恐るる時間の経てる旨申して始めて左様でありしかとて御下向」というようすだったと新聞は報じています。話題は関ヶ原合戦のことだったに違いありません。このとき皇太子の脳裡には、一〇年前に見た大きな関ヶ原合戦絵図が思い浮かべられていたかもしれません。